

<特集>

天邪鬼日記

お近くの寺院…旅先での名所旧跡で仁王門、あるいは毘沙門天像があったのなら是非とも仁王や毘沙門天の足元を覗いてほしい。その足下には、踏んづけられている小鬼がいることがある。正義の権化と化した仁王や毘沙門天に踏んづけられながらも尚、大きな口を開け、何か叫び続けている小鬼…「天邪鬼」と云う。天邪鬼、何でもかんでも人に逆らい最後に滅ぼされる小鬼…当方、生まれながらに天邪鬼であった。テレビの構成作家となっても60歳を前にしても、天邪鬼。そんな男に、実に何十年振りかでお会いした行政調査新聞の松本州弘社主が、「面白いから書け」とお命じになった。従って、少々、本紙の中では異色なものとなろうと思うが、書かせていただく。

放送作家 大辻民樹

白鳳の国籍

年老いた天邪鬼にとって最近のニュースの中で非常に気になったのは、横綱白鵬の日本帰化が明らかになったことだ。そして、これがまるで良いニュースのように報道されたことだ。これで、白鵬も親方になれると…。マスコミも法曹界もまるで問題にしない。大丈夫か、この国は？尚、私は白鵬ファンでも好角家でもない。鼻肩の遠藤、栃ノ心の取り組みにはちょっと熱くなる程度の相撲ファンである。とは云え、テレビ中継ながら相撲を楽しんできて五十年、素人目に見ても白鵬の凄さはよくわかる。誰が何と云おうと、白鵬は平成の、いや戦後の大横綱である。優勝回数にしても横綱皆勤場所にしても、二位の追従を許さず、しかも今も現役として記録を更新しつつある。

だが、何故か白鵬は、世の好角家、評論家と云う方々に評判が悪い。

令和最初の場所、2019年11月場所、日本相撲協会の諮問機関、横綱審議委員会・横審では、43度目の優勝をした横綱白鵬について「存在感を示した。優勝したのはよく頑張った」とねぎらったが、それ以上に、12日の遠藤戦での立ち合いで荒々しい勝ちあげを繰り返したことについて、「横綱の振る舞いとして見苦しいという意見がほとんど全員から出た」と云う。

漫画家や新聞記者の相撲評論家と云われる人びとの多くもこれを批判していた。これまでも張り差し、かちあげ、ひじうち、強烈な張り手などを繰り出す度に、白鵬は横綱としての品位に欠けるなどと批判を浴びてきた。だが、だがである。相撲は勝負である。勝負に順番をつけるとすれば、一に「美しく勝つ」ことである。そして二は「美しくなくとも勝つこと」である。「美しく負ける」ことなど全く意味ない。「美しくなく負ける」ことより下であるかもしれない。何故、このことが横審や世の好角家と呼ばれる方々にわかっていただけないのであろうか。

横審、ワイドショー等に出演する相撲評論家、この方たちの多くに共通することが知のエリートであることである。つまり、彼らは幼い頃から相撲を見るものとして楽しんできたのであろう。おそらく彼らの多くは、現実の体の痛みも己の体力の限界も知らぬままに育ってきたのであろう。その証拠に、白鵬のかちあげに文句をつける彼らの多くは、立ち会いで額をガチンコでぶつけ合う取り組みには実に正々堂々、素晴らしいと云うのだ。私は、その衝撃と痛みを考えるとあの「ゴン！」と音まで響く額のぶつけ合いには目を背けたくなる。

私は、両国界隈に住んでいる。相撲部屋はそこかしこにあり、早朝、散歩をしていると、フラフラと稽古用の廻し姿の若いお相撲さんが道端まで出てきてひっくり返ることがある。精も根も尽き果てたと、もうもうと体中から湯気を立てながらアスファルトの上に大の字になるのだ。しばらくは起き上がれない。彼らは、これほどまでに稽古しているのだ。何の為に？…勝つ為にだ。「勝負に勝つ」この為に彼らは正に死ぬほどの稽古を繰り返す。そして、それでも勝つことは難しく、多くの者が幕内に上がれず消えていく。それが勝負の非情であり、現実だ。

そこに、品格も美しさもない。あるのは、泥臭い勝利への渴望だ。勝たなければ、全てを失うのだ。それまでの凄まじい稽古、遊ぶ暇もない青春時代、痛み、奴隷のように扱われる日々…全て勝たなければ無に帰する。「一生懸命やったから後悔はしない」なんて、死ぬほどまでに一生懸命やっていない人の戯言だ「勝つ」と云うことはそれほどまでに厳しいものなのだ。

白鵬は、その中から勝ち上がり、横綱として君臨している。白鵬に批判的な評論家たちはいったい相撲に何を求めているだろうか。白鵬ももう 30 半ば、横綱となって十年以上、当然体力も落ちてきているだろう。それでも勝たなければならない横綱…その為のかちあげだったのではないか。そして、横綱をそこまで追い詰めた遠藤…スポーツの経験のある者にとっては、これほど興味深い取り組みはないではないか。いや、横綱は特別、品格あってこそその横綱だから…と彼らは云うかもしれない。しかし、格闘技にとっての品格とは何だ？それは、定められたルールに則って勝つことだ。

勿論、反則はいけない。反則をしていないのに、この技は品格があり、この技には品格がないなどと云われたら勝負が成り立たない。だが、見ることのみで育ってきた知のエリート、相撲評論家たちはそのギリギリの勝負に品格を求めたりする。何のスポーツであれ、練習で一度でももう死ぬと云う思いを経験している者は決して技に品格などと云う発想は持たない。

第一、遠藤にも失礼だ。遠藤は、あのかちあげで致命的な、あるいは重大な怪我を負ってはいない。お相撲さんの鍛え方を馬鹿にしてはいけない。遠藤はおそらく、今、次の白鵬戦に備えて勝つ為の工夫と稽古を必死でしているだろう。何とかあの強烈なかちあげをかいくぐり、大金星を上げる策を講じているはずだ。それを横審が品格がないなどと白鵬のかちあげを封じたら、遠藤の勝負師としてのプライドを傷つけることになり、同時に見る方としても次の白鵬・遠藤と云う取り組みの面白さを半減させることになる。知のエリートは、体のエリート、お相撲さんの勝負に品格などと云う甘い言葉で介入してはいけないのだ。今年の2月場所でも横審は思わぬ介入をしている。この場所で、白鵬は右腕を故障しながらも千秋楽の鶴竜との横綱同士の取り組みを制し、全勝で42度目の優勝を飾っている。

横審が問題にしたのは、白鵬が表彰式の後、インタビューを受け、そこで三本締め音頭を取ったことだった。横審の矢野弘典（産業雇用安定センター会長、中日本高速道路顧問）委員長は、委員会では「違和感を覚える」と云う意見が多かったと云う。

そして、優勝した横綱と云えども一力士としてやれる立場なのか、さらに手締めはすべてが終わった後にするもの、本場所が一番最後の神送りの行事が終わって全部終わるのだと。私には全くの云いがかりとしか思えなかった。それまで横綱日馬富士の引退まで発展した暴力問題に揺れた角界、白鵬はこの平成最後の場所で一からやり直そうと、国技館の観客とともに三本締めを行ったのだ。

私はテレビの生中継でその様子を見ていたのだが、ほぼ満員の観客の誰もが笑顔と感動で三本締めを行っていた。これのどこに問題があるのか？

横綱といえど一力士がやれる立場なのかとはどういう意味なのか。体を張って角界の暗雲を払拭しようとした横綱以外に誰がこの音頭を取れると云うのか？

彼らこそ、横綱の品格を無視しているのではないか？

そしてもう一つの問題が、ことあるごとに彼らが持ち出す「**神送り**」とか歴史的な権威付けだ。要するに、相撲は、スポーツであると同時に神事だと云う理屈だ。

この時も彼らは、「**三本締めは一番最後に行うべきものなのだが、白鵬はインタビューの後、つまり表彰式の途中で行った。三本締めは“神送り”と云う本場所最後の儀式が終わった後にするべきだ**」と批判した。

「**神送り**」とは、本場所の前日に行われる「**土俵祭り**」と云う儀式で迎えた五穀豊穡を司る神様を再び元の場所に帰って戴くために本場所終了後に行うもので、出世力士が三本締めし、その後で一番格下の行司を胴上げする行事だと云う。

彼らは、だからまだ千秋楽の儀式が終わっていない状態で三本締めをした白鵬はけしからんと云うわけだ。だが、「**神送り**」の儀式以外で手締めをしてはいけないと云う掟があるわけではない。そもそも手締めとは、ものごとが無事に終わったことを協力者に感謝するものである。決して、神様に向けての感謝ではない。

だとすれば、国技館に観客の多くが残り、テレビ中継がまだ行われているあの時に、「**諸々問題はあったがご覧のように力士は必死でやっています。今後も宜しくお願いします**」と、白鵬が手締めを行ったのは、実に自然なことである。それよりも何よりも、相撲は果たして神事なのだろうか？ 確かに今も地方の祭事などで行われる奉納相撲等にはその側面もあるだろう。しかし、大相撲は違う。大相撲の「**大**」とは興業である証である。江戸時代に「**大相撲**」と名付けられた時から、それは興業となったのだ。だからこそ、あまりの人気に何度も幕府によって禁止令さえ出されている。

私は、彼らの云う神聖なる儀式も私は今では人集めの為に付け足された演出の一つに過ぎないと思う。だから、彼らの云う神聖なる表彰式も、延々とスポンサーからの記念品・賞金の授与が繰り返されているのではないか。観客と視聴者は、この退屈な時間を白鵬のインタビューが聞きたくてずっと待っているのだ。

決して、「**神送り**」の儀式を待っているのではない。まるで神代の昔から受け継がれているように、三本締めを行っていい終了時とは神送りが終わってから…と、横審は云う。しかし、本当にそんな儀式は受け継がれてきたのであろうか？

私は、江戸時代あるいは明治、あるいはもっと新しい時代に単なる権威付けの為に決められた儀式だと思う。そもそも彼らの云う横綱と云う地位も近年に生まれたものだ。

江戸期、最強の力士は大関だった。名誉称号として、横綱を締められる大関を横綱と呼んでいたらしいが、番付で、横綱の称号が地位として認められたのは、1909（明治42）年のことだ。つまり、横綱の品格もその頃誰かが云い出したこと…、決して歴史あるものではない。

あの時の白鵬の三本締め…、あれは力士と観客が一体化した素晴らしい瞬間であった。だが、横審の委員には違和感があった。あれが白鵬ではなく稀勢の里でも、彼らは文句をつけたらどうか。私にはそうは思えない。ひよっとすると、彼らはモンゴル人の白鵬が偉そうに三本締めの音頭を取ったことに違和感を覚えたのではないかだろうか？

私はそう思えてしょうがない。

で、この稿で私がもっとも云いたいことに進む。

今年9月3日、白鵬はモンゴル国籍を捨て、日本に帰化した。日本人になったのだ。親方、年寄の資格を得る為だ。現役を引退した元力士が協会の正規の構成員としてとどまるには、原則として年寄になる必要がある。年寄の枠は歴史的な経緯からその名称まで固定されており、昭和2年（1927）年以降は**105名の定員**と決められている。

そして、年寄になるには日本国籍の保有、協会の承認などが条件となっているのだ。白鵬は、当初、モンゴル国籍のまま、親方にはなれないかと模索したと云う。

そりゃそうだろう。白鵬の父ムンフバト氏は、かつてモンゴル相撲の大横綱であり、メキシコオリンピック（1968年）の時にレスリングの選手として出場し、モンゴル初のメダリスト（銀）となった国民的英雄である。

その国民的英雄の息子が、また日本の大相撲で大横綱として成功したのだ。もう国民的英雄の二乗、白鵬はモンゴルの人たちにとってスーパースターであり、誇りであった。白鵬が、モンゴルの国籍の儘、親方を目指したのも頷ける。しかし、大相撲協会はそれを許さなかった。おそらく、白鵬はやむなく日本人になったのだ。引退後も親方として大相撲の世界に残るために…。

それは、モンゴル国民にとってはスーパースターの裏切りであり、白鵬にとっても苦渋の決断であったろう。今までモンゴルの英雄だった男が、日本人になる。モンゴル国民の思いは複雑だろう。イチローが、松井秀喜がメジャーリーグの監督となる為にアメリカ人になったらこの国の人はどう思うだろうか？

今やラグビーやサッカーでは、日本代表チームの監督を外国人に任せることは珍しくない。それどころか、彼ら外国人指導者のお陰で、日本のラグビーもサッカーも国際的水準に育った。そして、その世界と肩を並べる戦いに国民は熱狂するようになった。プロ野球の世界でも外国人監督やコーチもざらにいる。日本国籍を持つものだけしか親方になれないなんて、いったいいつの時代の掟なのか。それなら、最初から土俵にあげなければいいと思うのは私だけか。来るときだけウェルカムで散々、所属する部屋にそれこそ死ぬ思いで体を張って貢献させておいて、引退して相撲協会に残るには部屋の長になるには日本人にならなければならないなんて、誰が考えてもまるで詐欺まがいだ。

正に島国根性丸出しの恥ずかしいルールだ。

今まで、日本国籍を得て親方になった力士は、**高見山、小錦、武蔵丸、琴欧洲、旭天鵬の5人**、それぞれに葛藤と決意があったと案じられる。何しろ、親と違う国の人間になるのだ。そもそも**「年寄になるには日本国籍を有する」**などと云うルールが決まったのは、つい最近、1976（昭和51）年のことである。ターゲットは、ハワイ出身の高見山大五郎であった。当時、高見山大五郎が外国籍力士として唯一幕内に在位していて、高見山の年寄襲名を想定して追加されたのである。しかし、よくこんな条項が通ったものだ。

当時は、外国人力士が希少で高見山しかいなかったから通ったのかもしれない。しかし、今はアメリカ・ハワイ・モンゴル・ブルガリア・エストニア・ジョージア・ロシア・ブラジル・中国・韓国と、あらゆる国から力士がやってくる。その多くが成績と国籍条項で年寄襲名を諦めるだろうが、私なんかは両国にアメリカ部屋やら…ジョージア部屋…モンゴル部屋が出来たら楽しいだろうなと思うのだが…。

世界中に相撲部屋が生まれたら楽しいではないか。

日本においても、彼ら外国人親方の部屋は、勿論門戸開放。

私が期待するのは、誰より稽古熱心で取り組みの研究も欠かさない稀代の横綱だった親方・白鵬が育てる日本人力士だ。現在のモンゴル力士隆盛の相撲界で日本人力士の横綱を期待するなら、それくらいの覚悟が必要だろう。とは云え、現在の状態ではそれは夢物語に過ぎない。何しろ、力士の国籍には拘っていないくせに、親方にはなどと云う不自然な条件のルールが存在するからだ。

そこで、私は提案する。相撲界に多大な影響を与える**“知のエリート”**たちよ、声を上げろ！横綱を推薦すると云う横綱審議会の役目を超えて、白鵬にやたらいちゃもんをつける横審さんよ。一定の地位に就き、好角家だと云う横審メンバーさんよ。

“横綱の品格”やら**“白鵬の取り口”**なんかちまちましたことに文句をつけていないで、日本相撲界の品格を落とす**「親方日本国籍条項撤廃」**に何故立ち上がらない？

現在の横綱審議会のメンバーを上げてみよう。

岡本 昭	岡安証券最高顧問
勝野義孝	弁護士
高村正彦	元自民党副総裁
杉田亮毅	元日本経済新聞社社長
丹呉泰健	日本たばこ産業会長
都倉俊一	作曲家、日本音楽著作権協会会長
宮田亮平	文化庁長官、元東京芸術大学学長
矢野弘典	産業雇用安定センター会長、中日本高速道路顧問
山内昌之	東京大学名誉教授

財界・法曹界・報道・芸術界・学術…、正に**“知のエリート”**たちばかりではないか。

常日頃、民主主義や弱者の味方の顔をしている彼らが、何故、**「親方日本国籍条項」**に叛旗を翻さないのか。ましてや、白鵬がおそらく**“心ならずも”**親方になる為に日本国籍を取得したのは、この9月のことだ。何故、この人たちはそんな悲劇的なことを看過したのか。日馬富士の暴力問題の時にやたらワイドショーに登場したスポーツ記者・漫画

家・ミュージシャン等・好角家・相撲評論家と云う人たち、彼らもまた何故、この問題を取り上げないのか？ ま、なかなか云えない事情もわかる。

私が若い頃、やたらチェックが入って**「面倒くさい団体が三つ」**あった。

東京ディズニーランド、高野連・日本高等学校野球連盟、そして日本相撲協会だ。当時、おそらく今もだろうが番組でディズニーランドを取り上げれば、確実に数字・視聴率が上がった。従って、テレビ局はやたら気を遣った。

「今後のディズニーランドの取材は遠慮して欲しい」と云われれば、視聴率低下に直結するからだ。こうして、番組スタッフはディズニーランドのおかしい点には目を瞑り、夢と魔法の王国を醸成していった。高野連もまた視聴率稼ぎの甲子園と云う必殺コンテンツを持っていた。だから様々な矛盾、強制にも目を瞑り、汗と涙の青春甲子園を電波や紙面に載せた。当時、若貴ブームに沸いていた相撲協会も同様だ。**「以後、出入禁止」**と云われるのを恐れて、ひたすら協会側の云う通りの番組造りに励んだ。

今も、相撲協会に寄生して生きているスポーツ紙上がりのジャーナリストたちにとっても、相撲協会に叛旗を振りかざすなんて死活問題だろう。漫画家やミュージシャンなどの好角家も同じだ。彼らの自慢は、〇〇部屋には自由に入れる、〇〇関とは友達だ、とか相撲協会にどれだけ近いか、なのだ。で、結局、彼らは情報は相撲協会から得る。

国会や警察やと同様に記者クラブ制度に甘んじているのだ。あの日馬富士事件の時のワイドショーやニュースの中で、自分の眼と足で内部まで食い込み取材したジャーナリストがいただけるか？

誰もが相撲協会、あるいは日馬富士側、貴乃花側の発表だけを鵜呑みにして、その上で自分の勝手な意見を述べていたに過ぎない。勿論、ワイドショーのコメンテーター、好角家と呼ばれる者たちも同様だ。いや、もっと酷い。彼らは、相撲界の未来を考えるとといった顔をしながら、自分の好き嫌いを云っていたに過ぎない。

なあ、皆さん、自分の周囲…親…親戚…友…街の人びと…、そんな人びとの期待と夢を裏切って、国籍を変える者の気持ちになってみてよ。

国際的なルールから見ても、**「親方日本国籍条項」**は言語道断、先進国のルールとは思えないであろう。相撲がもっと国際的になり、この問題が取り上げられれば、すぐに外圧でこんなとんでもない条項は破棄されるだろう。でもその前に好角家の**“知のエリート”**の皆さん、まず自分たちの力でこんな品格のない条項を外しましょうよ。